博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　井　上　　史　雄　　印

【審査結果】

本論文は、日本と韓国の第三者敬語の運用に焦点をあてて、使用実態をとらえ、それぞれの言語で現在進行中の社会言語学的変化を、言語普遍的な傾向の中に位置づけようと試みたものである。日本語と韓国語で典型的に観察される言語変化について、各種の実態調査を行うことにより、聞き手への配慮のほうが優先するという共通の傾向を見出した。これまでの敬語の対照研究は、アンケート調査によることが多かったが、本論文では談話資料をも対象とすることによって、実際の場面での敬語使用をも見ようとした。日韓敬語の対照研究の分野で、これまでの各種成果の水準を抜くものであり、今後の研究で無視できない貢献をなしたと、位置づけることができる。研究者の出発点として十分な位置に立つと評価され、博士号授与に値すると、判定された。

【研究の位置づけ】

世界の敬語の中でも日本語と韓国語は、聞き手だけでなく、話題に出た第三者への敬語形式を有する点で、欧米はじめ世界各地の諸言語でみられる二人称代名詞の敬語的使い分けなどと違っており、敬語使用の社会言語学的な変化（パワーからソリダリティーへ）を研究するのに、興味深い手がかりを提供する。

日本語敬語の研究は、まず文法的な用法の面で進み、その後社会言語学的用法の解明が盛んになった。日本語の敬語の歴史については、金田一京助以来「絶対敬語から相対敬語へ」という変化が指摘されており、これを補強する様々な研究がある。現代語では相対敬語化がさらに進行して、敬語全体が聞き手目当てに、つまりは丁寧語であるかのように、使われる傾向がある。一方韓国語の敬語は、未だに絶対敬語の色彩をとどめているとされるが、最近聞き手を考慮に入れた相対敬語的傾向が見られる。日韓の変化はともに、第三者としての話題の人物と、聞き手の関係をどう扱うかの問題に関わる。

聞き手への配慮というのは、敬語の民主化・近代化という世界の普遍的傾向と結び付けうる現象である。この敬語用法の変遷を確かめるには、聞き手と第三者の相互関係をみるのが、効率的である。第三者敬語に焦点を絞って、聞き手との扱いの違いを見れば、敬語用法全体の変化の徴候を効率的にとらえることができる。この種の研究は、文法的な敬語形式の整った日本語と韓国語で、ことにきれいな結果が期待される。

【研究資料の収集と分析】

本論文では、敬語変化論の焦点とも言える現象に関心を集中して、多様な実態調査を試み、日本語・韓国語の現代の言語変化をとらえるのに成功した。電子化された談話資料をも扱うなど、データの性格も新しい面を含み、新鮮なテーマを手際よくまとめている。

日韓の敬語の対照研究は以前から行われてきたが、第三者に関するものはそう多くなく、あったとしても大学生のアンケート調査に基づくものが主だった。本論文の研究手法としては、大学生以外に社会人を対象としたアンケート調査だけでなく、シナリオ談話分析、自然談話分析を用い、実際の言語使用に肉薄しようと試みた。得られた多量のデータは、コンピュータによって解析した。いずれの研究手法をとっても、同様の傾向が見出されたことから、結論は相互に補強される形になり、信憑性がさらに増した。

全体を通して得られた結論は、日本語でも韓国語でも最近は、話題に出た第三者よりも面前の聞き手に配慮して敬語形式を選ぶ、という傾向である。すなわち、日本語では聞き手が第三者より上位になるほど、第三者敬語が多用される。「正しい敬語」としては、第三者よりも聞き手が上位の場合は、第三者への敬語を控えるべきだとされているが、実際には、第三者に敬意度の高い敬語を使う傾向が見られる。学部学生が教授に向かって、「(助教授の) ○○先生もいらっしゃいます」というような例が典型である。他方学生どうしだと、「先生が来た、来た」という。これは聞き手の影響で第三者に対する尊敬語が使われることを示しており、「第三者敬語の聞き手敬語化」を表す。聞き手への配慮が優先されるという、日本語の長期にわたる敬語変化の流れと一致している。

これに対し、韓国語の場合は、第三者が聞き手より上位であるほど第三者を高める。調査結果によれば、韓国語の場合は、聞き手によって、第三者を高める度合いが変わり、「絶対敬語の相対敬語化」の現象といえる。本論文ではこのように、韓国語における「絶対敬語の相対敬語化」や「圧尊法の崩壊」という可能性を提起し、将来的には韓国語も日本語のように、対人関係を重視する「相対敬語」へと進むことを予測する。

つまり日本語と韓国語はほぼ同じ方向の敬語変化を起こしていることになる。敬語の社会言語学的研究の一般理論に照らしても妥当な結論である。

さらに、それらの変化を主導するのは、女性であり、また、若年層の社会人であることも明らかになった。以上の考察で、言語の違いを越えて、対人敬語の優位にあるという共通性がみられ、しかもその普及過程にも共通性がみられた。

【研究の評価】

本論文は、具体的調査データを踏まえて、数表やグラフを利用し、多変量解析法を適用したり、総合的数値をたくみに組み合わせたりして、簡潔な文体で分かりやすく記述されている。

一部改良すべき点が指摘された。例えばアンケートデータについては、他の調査にくらべて量が少ないが、日韓の大学・社会人の協力は知り合いの知り合いを頼るいわゆる機縁法によるしかなかったという事情も存在する。全体の数値として日韓の対比を行うには、十分信頼できる数字である。研究史および研究の位置づけなどいわば序論にあたる部分の、理論的まとめに安易な一般化が見られる、などの批判もあったが、これは、具体的調査データの分析から理論的な結論を導き出すという、論述自体の信頼性をゆるがすものではない。

論文本体の完成度はきわめて高いと評価できる。日韓の敬語対照研究は今再び脚光を浴びつつある、魅力的な研究テーマだが、その発展に資するところは大きい。研究者としては、すでに十分な修練を積んでおり、将来も研究を続行し発展させようという意欲が旺盛である。博士号授与に十分に値すると判断された。